

スナップエンドウ

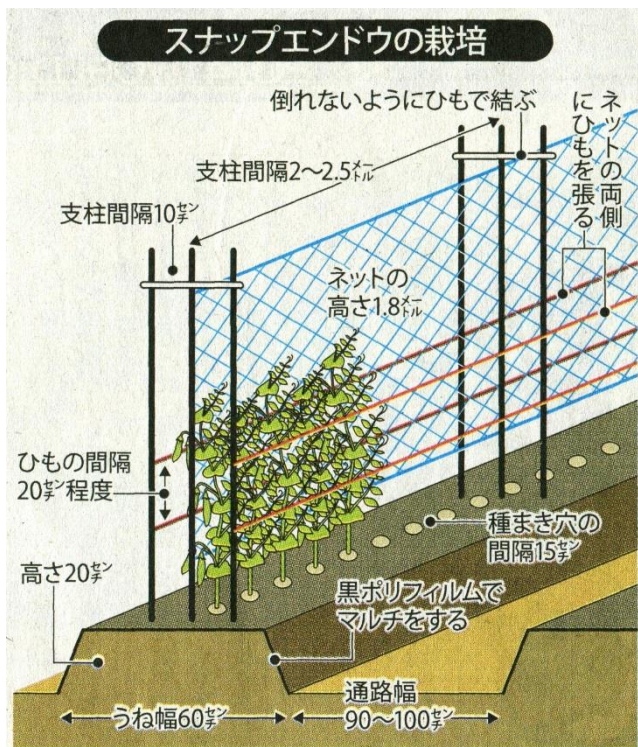
開花期以降の寒さ注意



—中島 純

スナップエンドウは、北アメリカで育成されたエンドウの一種で、日本へは昭和50年代に導入されました。「スナックエンドウ」とも呼ばれ、大きくなった実をさやごと食べるエンドウです。

実が大きくなってもさやが軟らかく、たいへん甘いのが特徴です。さやは肉厚で歯切れが良く、緑色が鮮やかです。栄養価が高く、糖分やタンパク質、カリウム、カルシウム、鉄、ビタミン類のほか、食物繊維などを多く含み、和洋中とあらゆる料理に利用できます。調理も簡単で、特に収穫したてのさやをさっとゆでて、塩やマヨネーズなどをかけて食べると、たいへんおいしいです。



スナップエンドウには「つるあり」と「つるなし」の品種があります。ここでは、「つるあり」の秋まき冬春どり栽培を紹介いたします。

生育適温は12～18度で、25度以上の高温や、2度以下の低温ではさや着きが悪くなったり、形の悪いさやが増えます。また、開花期までは比較的寒さに強いですが、開花期以降に氷点下2度以下の低温にあうと、成長点が止まり、その後の収穫が望めなくなります。

このような特性から、霜の降りない暖かい地域では冬どり栽培（種播きは9～10月）が可能で、霜が降りる冷涼な地域では春どり栽培（種播きは11～12月）が適します。

連作障害を起こしやすいので、4、5年間マメ類を栽培していない日当たりと排水の良いほ場を選びます。種播きの1週間前までに1平方メートル当たり堆肥2kg、苦土石灰100g程度を施し、できるだけ深く耕します。

化学肥粗はうねの位置に、うねの長さ1m当たり100g（窒素、リン酸、カリが15%の場合）施します。うねは幅60cm、高さ20cm程度の大きさに作り、黒ポリフィルムでマルチをします。複数のうねを作る場合は通路90～100cmとします。種の播き方は15cm間隔に穴をあけ、1穴に2、3粒ずつ、3cmの深さに播きます。

つるが伸びたら、ネットを張り、つるを誘引します。つるが伸びるのにあわせてネットの横に水平にひもを張り、つるが倒れるのを防ぎます。つるがネットの上部に達したら、つるの成長点を摘み取ります。弱い霜は不織布などで覆うと被害を防げます。花が咲きだしたら、1カ月に1回程度の間隔で追肥します（植え穴一つ当たり化成肥料3g程度）。

開花から25日程度を目安に、実が大きくなった鮮やかな緑色のさやを収穫します。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室研究専門員）